

ドル/円相場のトレード戦略

■ 中長期展望

注目されていた英国の国民投票の結果は、大方の予想を裏切る EU 離脱となりました。ドル/円相場は直近の安値 103 円 55 銭をあっさり割り込み、2013 年 11 月以来の 100 円割れとなり、一時 99 円ちょうどの安値まで下落しました。

【ドル/円 週足】



英国の EU 離脱は世界経済の先行き不透明感を強め、また米国の早期利上げを妨げるものと捉えられており、中期的にドル/円は円安に大きく戻る見通しはとて描けず、95 円割れをもイメージする必要が出てきました。

95 円水準は、2011 年の安値から 2015 年の高値の 61.8%戻しとなっており、当面のドル/円の下値の目処となります。

しかし、52 週移動平均との乖離で見ると、6 月 24 日につけた 99 円では約 15%の下方乖離となり、リーマンショックを受けドルが下落した 2008 年の下方乖離とほぼ同じ水準になることから、過度な下がり過ぎの反動での短期的なドルの戻りも期待されます。

また、10 兆円規模の大型補正予算への期待やヘリコプターマネー政策への思惑が円の上値を抑える要因となっていることから、当面は再び 100 円～110 円のレンジ相場が続くこととなりそうです。

■ 短期展望

先週は、週前半は日米の金融政策決定を前に小動きでしたが、後半に入り決定された金融政策への失望からドル安・円高が急激に進む動きとなりました。

ドル/円相場のトレード戦略

特に、日銀の金融政策に関しては、市場の期待感が高すぎたために、その反動としての失望感は大きく、金曜日一日で一気に102円水準まで急落する動きとなりました。

今週は、先週末の流れを引き継ぎドルの上値の重いスタートとなりましたが、8月2日に閣議決定される政府の大型経済対策への期待で日本株が底堅い動きとなる可能性があることが、ドル/円を下支えする要因となりそうです。

また、先週末の大きな上下動を経てポジションやオーダーは減少しており、ドルの下値を積極的に売り込んでいくことは難しいでしょう。

さらに、週末に米雇用統計を控えていることも模様眺めムードを強くするでしょう。

したがって、今週は101円～104円のレンジ相場を想定して、戻り売りをメインの戦略とし、米雇用統計が予想を下回った場合は、再び100円割れを試しにいく可能性をリスクシナリオとしたいと思います。